



めずらしく朝一に来た俺は、一番最初に教室の窓を全開にした。日直ってめんどくさいけど、どんよりとにごった教室の空気が朝の清々しい空気に入れ替えられるのは気持ちがいい。

しかし！ その清々しさがヤツの登場で一変した。同じく日直の黒野。ヤツは何故か花瓶にマーガレットをぶちこんでいた。

「日直だからってなにも花なんて持ってこなくてもいいんだぜ？」

それとなく意見すると、黒野はぎくりとした顔でこちらを見て、渋そうに笑った。

「まあ、な」

曖昧に答える黒野は、「日誌を取ってくる」と言って、ふらふらと教室を出て行った。寝不足か？ 俺は黒板消しをクリーナーで綺麗にしながら、奴が戻るのを待った。

もしかして中間テストで勉強のしすぎか？ でも俺を含め黒野はテストでぎゃあぎゃあ言うタイプではない。中学からの知り合いだからな、ヤツの生態は把握している。

そうだ。どうせテストの山を聞かなくちゃならないんだし、今日あたり家に遊びに行ってみるか！ ふらふら戻ってきた黒野に、俺は提案した。

「なあ、明日っから中間だろ？ 今日お前んちで一緒に勉強しようぜ」

すると黒野は、素っ頓狂な声を上げてたじろいだ。

「ええ！？」

「なあ、頼むよ。このとおり」

拝むと、らしくなくうろたえた。

「で、でも、今日両親とかいないし…」

黒野の両親は医者で夜勤も多い。俺は家に帰るのが面倒な時に、よく泊まらせてもらったりするから、問題ない。

「ラッキー！ じゃ、放課後泊まりで行くからな！」

固まった黒野の肩をばんばんと叩き、俺は綺麗になった黒板消しを溝に置いた。

いつもなら『今日親がいないから来いよ』なんて言うくせに。やっぱりなにかある。それを探らねば！ 明日からのテスト？ そんなのどうだっていいだろ？

放課後、夕食用の弁当と夜食のカップ麺、それにお菓子とジュースをレジ袋二つ分わんさと買い込んで、俺たちは黒野の家に向かった。黒野は諦め悪く「今日……だめなんだけど」と、しきりに言う。本当に来て欲しくなさそうだが、関係ないね！

黒野のマンションに着くと、俺は“〇〇探検隊”な気分の中に入った。いったいこの家でなにが？ しかしワクワクしている気持ちとは裏腹に、家の中はふつ～だった。

黒野も「そこに座れ」と言いながら買ってきたジュースをグラスに注ぎ、

「それじゃ、勉強しようか」

と、ふつ～に勉強を始めた。ちえっ！

淡々と勉強は進み、晩飯の弁当を食べ、夜食のカップ麺を啜りながら、リビングで黒野秘蔵映像（これが結構えっちい）を見たりして、それはそれはいつもどおり和やかに穏やかに時間は過

ぎていった。

なんだ。何も変わったことなんてないじゃないか。

あの花もきっと、親が持って帰って来たものかなんかを学校に持って来ただけか。

しかし、着がえ終わって、さて寝るかという段階で事態は急変した。

「俺、親の部屋で寝るから。お前この部屋使って」

と、自分の部屋からさっさと出て行ってしまったのだ。

「……え？」

ぽつんと部屋に残された俺は呆然とした。いつもならヤツの部屋で、布団の中で遅くまで喋っているのに。……アヤシイ。なにやら秘密の匂いがする。

よし、夜中にこっそりと見に行ってみよう！ マーガレットの謎を見極めるのだ！

うろたえる黒野の顔を想像して、俺はくくっと忍び笑いをした。

さて、寝たふり寝たふり。

でも布団に転がった俺は……結局そのまま眠ってしまった。

ふと、目が覚めると辺りは真っ暗だった。

壁掛け時計に目をこらすと、うっすらと時計が午前三時を差しているのが読み取れた。

「よっしゃ」

寝過ごさなかったことににんまりと笑いながら小さくガッツポーズをしてベッドを降りると、足音を忍ばせてあいつの両親の部屋に行ってみた。

すると、部屋の中から奇妙な音がする。ぱちん、ぱちん、と何かを切っているような音。

この家には今あいつと俺の二人だけのはず。こんな夜中に、あいつは何を切ってるんだ？

そっと中に入って、目をこらす。すると、暗い部屋の真ん中にうずくまる影が見えた。その肩に、白い花が暗闇、ふわふわと浮かんでいるように見えた。

はあ！？ こんな夜中に、いけ花か！？

暗闇でいけ花をする流派なんかあるのか？ いやそれより、黒野にこんな趣味が？！

心臓バクバクさせながら俺が立ちつくしていると、ふと、黒野が振り向いた。

その顔に……

「見いたあなああ！！」

俺は思いっきり後ずさりし、柱にすがりついた。暗がりの中に浮かぶ黒野の顔に、マーガレットが！！

「なんだよそれ！ 何の冗談？ さてはビックリカメラ！？ カメラはどこだ！」

思わず声が裏返った俺に、黒野はふうっとため息一つ。

「電気、付けて」

言われるまま電気を付けた俺は、まぶしさに目を細めた。目が慣れたところでおそろおそろ黒野を見た。そして俺は再び驚愕した。

そこにいたのは鋏を手にもうずくまる黒野。床に散らばる花、花、花。そして、黒野のすね毛だらけの足からパンツの中から背中から、体中の至る所から生えている……マーガレット。

「今日は特に酷いんだ」

ぱちん。鋏の音で俺は、我に返った。

「……ずいぶん手の込んだビックリをするんだなあ。そろそろカメラの位置教えてくれよ」

どこにあるんだ？ そこかしこに向かってピースしてやると、黒野は大きくため息をつきながら俺に鋏を差し出した。

「さすがに背中が手が届かないな。切ってくれ」

「お、おう」

鋏を持って、背中の太い茎の根本を見た。あれ？ のりとかで貼ったんじゃないか？

「本当に生えてるのか？」

つんつんと背中のそれを引っ張ると、

「い、いてててて！」

黒野は顔を歪めてこっちを睨んだ。本当に痛いらしい。

「で、どこからどう切ればいいんだ？」

「ああ……あんまり下だと痛いんだ。少し上で切ってくれ」

「ふ～ん」

俺は慎重に、背中のマーガレットに鋏を入れた。不思議なことに、刈り取った後の切り口はぼろりと落ちる。ちょっと面白くなって、切っていく。

最後の一本を切り取った時には、辺りは足の踏み場もなくなっていた。

「鷺山、サンキュウ。なんか飲もう」

黒野はよろっと立ち上がり、リビングに向かった。俺もその後を追う。

冷蔵庫から出した冷たいジュースを、俺たちは無言であおった。何か話そうと思うのだが、頭の中に渦巻くマーガレットが邪魔して言葉がまとまらない。

「……病院とか、行ったのか？」

「行ったら治るのか？」

黒野の言葉に「ごもつとも」と答える。体から花が生えるなんて聞いたことがない。十中八九、相手にしてもらえない。ヘタすると珍しいからって病院に入院したまま出られない、なんてことになりかねない。

「それで、ど～してこんなことに？」

「原因がわからないんだよ」

いらだちながら黒野は言った。

「いつから？」

「もう、一週間くらい、かな」

「一週間？ その間ずっと？」

「そうなんだよなあ。ははは……」

乾いた笑いが黒野の口から漏れる。

「その、一週間前に変わったことなかったか？ たとえば花を踏んだとか」

「花の祟りってか？ ないない。大体そんな……」

と、言いかけて、黒野の動きがぴたりと止まった。そしてヤツは青ざめた顔でジュースの缶をテーブルに置くと、ベランダに通じるサッシを開けた。何だろうと後ろから覗き込むと、そこには小振りの鉢植え。そこに植えられていたのは薔薇だった。しかも青い。黒野はうっとりとした顔でそれを眺めていた。

「珍しいだろ？ 青い薔薇なんて。新種じゃないかと思って、この前山で掘ってきたんだ」

「勝手にか！？」

「花盗人には罪はないってな」

にんまりと笑いながら、黒野は薔薇の鉢を持ち上げた。

「しかも光るんだよ。これ」

ふんわりと青白い光が、あいつのうっとりとした顔を照らしだす。その表情に俺はぞっとした。なんかわからないが、これを持っている黒野は普通じゃない。

「ぜえったいこれが原因だ！ 今すぐ捨てに行こう」

「嫌だ。せっかくの新種を！ 一攫千金を！」

そこかい！！

「黒野、冷静になって考えてみろよ。これが来てからだろ？ 体から花が生えてくるようになったの！ こいつを戻せばきっと生えてこなくなるって！」

「……でもこれが原因だと断定してない」

欲に目が眩んだ黒野は頑なに拒否する。

「……おんまえなあ！ 今の状態はどう考えたって異常だろうが！ それに夜生えてくるって決まった訳じゃねえんだぞ？ 昼間に生えてきたらどうするんだよ。ビックリ人間ショーとかに売り飛ばされるのとこれを返して普通になるのと。この場合、どうするのが正しいと思うんだ！？」

もう俺もなんだか訳が分からなくなってる。ともかく必死な俺は、黒野の背中をばしばしとひっぱたいた。少し手がじんじんする。

「そりゃ…」

と、いいながら黒野は口をつぐんだ。よし！ 思考停止してるな。すかさず俺は黒野から、鉢をひったくった。

「とにかく、これは返しに行くぞ！ で、どこで拾ったって？」

「裏山」

学校の裏にある山のことだ。ここから自転車で15分ちょっと。

「じゃ、行くぞ！」

黒野の返事を待たずに、俺は玄関を飛びだした。

黒野の自転車を拝借して前かごに薔薇を放り込み、ヤツを後ろに乗っけて暗い道を疾走する。薔薇は青白い光を放ちながら、心なしか首を持ち上げるように揺れた。その時、

「うわ！」

後ろで悲鳴のような上ずった声がした。なんだかわさわさと背中に当たる。

「どうした！」

振り向くと、黒野の右袖からマーガレットが顔を出していた。さらに、衿もと、頭のとっぺんからも花が咲く。

思わずブレーキを掛けそうになったが、学校の裏山は後五分くらいだ。行くしかない！

「うりゃあああ！」

俺は全速力で夜中の道を走った！

しばらくすると、頭上に妙な圧迫感を感じた。音はない。ただ大きなものが上にいる感覚。おそるおそる見上げる。……なんだ？ あの大きな影は？！

煌々と照る月の光を遮りながら、そいつは学校の方へと向かっている。

その時、黒野が声を上げた。

「学校だ。学校に、行こう」

「山じゃないのかよ！」

「学校に来てくれて……誰かが……言ったんだ」

まさかとは思うが、今の大きな影が呼んでるっていうのか！？

「急ごう」

学校に着くと、校庭の側で自転車を止め、フェンスの破れをくぐって、薔薇の鉢を抱えて走った。校庭の真ん中で、さっきの大きな影が俺たちを待っている。

いや、影ではなく、それは……。

「U F O……？」

「はは……そうみたい」

こうなると、もう笑うしかない。

その時鉢の中で、ぐうんと青い薔薇が首を伸ばした。そしてにゅっと葉が伸びて、俺の頬に触れた。途端、ぷつとトゲに刺されたような鋭い痛み。

「ってえ！　なんだこりゃ！？」

俺の頬から、何かが生えてきた。

「げげ！」

触ってみるとそれは柔らかく瑞々しい葉で、慌てて抜こうと引っ張ると、頬の肉までちぎれそうになった。諦めて、恨めしく薔薇を見下ろす。と、突然耳元で声がした。

『ごめんなさい。でも通信機をセットしないと私たちの話を聞いてもらえないと思ったから』

「黒野！　こんな時に、女声作って喋るなよ！　悪趣味なヤツだな」

「何も言っていない！」

黒野はぶんぶんとう首を横に振りながら否定した。

「ごめんなさいって言っただろ、今」

『あの、聞こえてますよね？』

「だからさあ、気持ち悪い声出すなって」

冗談きついで、と、思ったのだが、黒野はさらにはげしく首を横に振っている。

『私は、あなた方が青い薔薇だと思っているものです』

手元で青い薔薇が、揺れた。

「ええええええ！？」

黒野と俺が叫んだその時、黒い影の方からも、声が聞こえてきた。

『よかった、無事だね』

『パパ！ この方達がね、ここまで連れてきてくださったのよ』

『そうか、お礼をしなくてはいけないね』

そうして黒い物体の真ん中がぱかっと開いて、中から身の丈二メートル、花の直径一メートルの巨大な青い薔薇がゆっくりと、歩いて、出てきた。

「……歩してる、よな」

隣の黒野を小突くと、

「歩いているな。薔薇が」

思いの外冷静な口調で、答えが返ってきた。いや、もうこれは騒いでもしょうがないっていうか、夢だ。絶対に夢だ！

『本当にありがとうございます。これで帰れます』

手元から声がある。目の前にあるのは紛れもないUFO。もしや、この青い薔薇は、花の形はしているは、

「宇宙人、ってやつなのか？」

『そうです。旅行でこの星に来たのですが、小型艇が故障してしまって不時着したんです。連れて行かれたときには少々不安でしたが、親切にしてくださってうれしかったです。勝手に通信機を生やしてしまって、ごめんなさい』

などと小さな青い薔薇が言う。それって、この俺と黒野の体から生えているマーガレットのことか？

「花で連絡を取るのか？」

『はい。最近売り出された最新型です。生体エネルギーを使って電波を出すものなので、他星の生き物にも対応可能なんです。それに、その土地にある花に擬態するので不自然ではないとのことで、かなり画期的なものなんです』

にこにこ、としてるのだろう、直径一メートルはあろう青薔薇がわさわさと揺れながら光る。

「めちゃくちゃ不自然だったけど？」

俺の言葉に、デカイ薔薇はおかしそうにさらに揺れた。

『ああ、もう行かなくて。この子に親切にしてくださってありがとうございました』

黒野ははっとしたように青い薔薇を抱きかかえて往生際悪く叫んだ。

「いやだ！ 俺の新種！」

しかし身の丈二メートル、直径一メートルのでかい青薔薇がえっちらおっちらと近づいてきたので、恐れを成した黒野は渋々小さな青薔薇の鉢を差し出した。ヤツは器用に葉っぱでそれを受け取ると、ゆっくりとお辞儀をした。

「ちょっと待った！ この通信機とやらはずっとこのままなのか？」

これを聞いておかねば、安心できない。まさかこのままなんてことないだろうな！？

『いいえ。植え付けてから地球時間で七日間くらいで「種」が出来ます。それで通信機は外れま

すので。もし次に使われるときは、その種を植えてください。そうすれば、私たちと通信できますよ』

通信なんぞ、もうするもんか！

『では、お世話になりました。またお会いしましょう』

そうして、青薔薇親子は仲良く揺れながら黒い物体に乗り込んだ。その直後、それはふんわりと音もなく垂直に上昇し、飛び去った。

俺たちはしばらく飛んでいった先をぼんやり眺めていたが、はた、と、数時間後の中間テストの事を思い出した。

「帰ろうか」

黒野の肩をぽんと叩く。と、なにか硬い物に触れた。何だろうと思ってつつくと、ぽろりと取れた。黒野が背中を探ると、シャツの中からアボガドの種みたいなものが出てきた。これか。あいつらが言っていた種ってのは。

「これで花は生えてこないってことだ。よかったじゃないか。さて、帰ろうぜ。今日は中間の初日だし、少しは寝ないと試験中に居眠りしそうだ」

黒野はがっくりと肩を落として頷いた。

これで一件落着

……の、はずだった。

「んな————っ！」

翌日、頭のとっぺんからわさわさと生えてきたマーガレットに俺は絶叫した。

そういえば、俺はまだ通信機とやらを埋め込まれたばかりじゃないか！

パパ青薔薇の『種になったら外せます』という言葉に殺意が浮かぶ。それまでこの花に悩まされなくちゃ行けないのか？ テスト中なのに！？

「今度会ったら生け花にしてやる——っ！」

叫ぶ俺の頭上で、愉快そうにマーガレットが揺れた。

白い華（加納君の苦悩）

白い華。

毎夜、それは夢に現れる。

闇の中に浮かぶ、白く甘く香る、大輪の華。

その華をととてもよく知ってはいはずなのだが、思い出せない。

あれはなんという名前だったろう……。

翌日、目を覚ますと白い枕カバーがしっとり濡れていることに気が付いた。うすぼんやりと見えるそれに目を凝らす。間違いなくそれは、なにかが零れた後だ。思わず自分の頬に手をやる。そこは不思議と濡れていた。どうやら泣いていたらしい。どういう夢を見ていたんだろう。泣くなんて。時計を見ると少し早い起きる時間だ。温かい寢床から出るには惜しいけど思い切って出て、パジャマのボタンに手をかけた。その時、

『どこに行くの？』

後ろで声がした。

「学校」

振り向かずに答える。

『楽しい？』

「それなりにね」

『……やっぱり忘れてしまったのね。早く思い出して』

「何を？」

そう言い返して振り向き、ぞっとした。ここは自分の部屋。俺しかいないはずなのに声が聞こえるなんて、幽霊でもいるのか？ 薄ら寒くなった背中感触を振り払いながら制服を着込み、カバンを掴んで階下に降りた。台所では両親がそろって朝ご飯を食べていた。

「おはよう。今日は早いのね」

僕を見つけた母さんが立ち上がり、白いご飯をよそってくれた。

「……うん」

生返事をし、自分の席に着くと並べてある朝食に箸を付ける。

あれ？ 今日は何日だっけ？ 思い出せない。

「母さん、今日って何日？」

「11月7日よ。……なにぼんやりしてるの？ 寝不足？」

心配そうな母さん。父さんもこっちを見ている。そんなにおかしな事を言ったかな？ ただ確認しただけなのに。

何故か重い足取りで学校までたどり着き、やっとの思いで教室に入ると、窓際で黒野と鷺山がバカみたいに笑っていた。席について上着を脱ぐと、あいつらは僕に気が付いて手を振った。

「おはよう、加納。あれ？　なんか元気ない？」

黒野が首をかしげながら言う。

「ああ、ちょっとな」

そう言いながらも頭はぼんやりしたまま。教室の床は一步步くとスポンジのように沈む。昨日はちゃんと十一時には寝たはずだけどなあ……。

「加納～、今日の宿題やってきた？」

いきなり鷺山に言われて、

「嫌だね」

返して笑ってやったその時、ざわつく教室の音が一瞬止んで、心の隅であの夢が蘇ってきた。じわじわと白い華が頭の中を占領し始める。あまりの芳香に思い出ただけで頭の芯が麻痺するようだ。

『こっちに来て。私と一緒に』

あの声が、頭の中で木霊する……。

「おい、大丈夫か？　加納！」

あいつらの声を遠くに聞きながら、そのまま甘い夢を見続けた。

気がつくとも保健室だった。

「あら、起きたの？　いったい何時まで起きていたの？　夜更かしもほどほどにしなさいよ」

年配の保険医が枕元で微笑んだ。あれから眠ってしまったのか？

「早く授業に戻りなさい。といってももうすぐ昼休みだけど」

「え？」

そんなに？　昨日は11時にはベッドに入ったはずなのに。

あの夢のせいなのか？　あの甘い夢の……。

夢は昼夜を問わず、甘い眠りと共にやってきた。どんなに眠ってはいけないと思っても引きずられてしまう。夢がやってくると意識を失い熟睡するらしく、教師も友達も気味悪がった。

「なあ、加納。大丈夫なのか？」

「何があったかお兄さん達に教えなさい」

黒野と鷺山がやってきて、頭をガシガシと撫でる。いつもなら手を振り払うけど、その気力すらない。

「ああ、それがさ……」

しつこい二人にあの夢のことを話した。欲求不満だと笑われるかと思っていたが、意外にも二人は真剣な顔で聞いてくれた。

「それって、なんかやばいんじゃない？」

黒野は眉をひそめた。いつもおどける鷺山も真剣な顔だ。

「加納さあ。その夢を見るようになったきっかけみたいなものを探せよ。その華はなにかお前にアプローチしているんじゃないのか？」

黒野が心配そうにそう言ってくれるのだが、思いあたらない。すると鷺山がひきつった顔で言った。

「まさかと思うけど、花を助けたりとかしてないだろうな？」

「……おぼえがない。けど」

すると鷺山はぐふふと笑った。

「ひょっとして宇宙人、だったりしてな」

「鷺山、それ洒落にならない」

黒野が顔をしかめる。宇宙人なんて、いったいどうしたらそんな考えにたどり着くのか。まだ幽霊の方が信憑性がある。

「今でもその声はしているのか？」

「ああ。こちらにくるようにしきりに誘っている感じ」

そう言うと、黒野は、にんまりと笑った。

「じゃあさ、今日泊まりに来いよ。俺たちが原因究明してやる」

「は？」

急に何を言い出すんだらう。そう思っていると鷺山はにこにここと、

「黒野もこう言ってることだし？ それに今のままじゃ倒れて学校に来られなくなるぞ？」

たしかに何がなんだか判らない状態のままはごめんだ。

「わかった」

そして僕たちは黒野の家に泊まることとなった。その時黒野と鷺山が「アレを持っていこう」なんて言っていたが、なんのことだろうか？

家に帰ると母さんから黒野の家に泊まることを無理矢理ではあるが許してもらい、黒野の家に一番近いコンビニで二人と待ち合わせた。しばらくして黒野が来たが、鷺山はまだのようだ。宿題が終わらず出してもらえないらしい。三十分待ってみたがまだ来ない。窓の外では大きな月が上り始めた。

「鷺山はまだ来ないのか？」

「さっきメールあったから、すぐ来るよ」

俺たちはコンビニの駐車場の車止めに腰を下ろして月を見上げていた。

「なあ加納。その声は今でもしてるのか？」

黒野はそう言いながらこちらを見た。僕は小さく頷いた。

「している。それから白い大きな華のイメージがずっと頭の中にある」

「華ねえ。どんなやつ？」

華を思い出しているうちに彼女を思い出していた。

白い華の中でまどろむ彼女。艶めく肌。ねっとりとした蜜の香り。

「綺麗だよ。白くて甘い匂いがしていて……」

なんて説明をしていると、黒野がうろたえた様子で俺の後ろを指す。

「……お、おま、ちょっとそれ」

何だろうと思って振り向くと、あるはずのコンビニが黒い霧に覆われて見えなくなっていた。

「これって、夜霧っていうんだっけ？」

「アホか。取り込まれたんだ！」

慌てて黒野は携帯を出し、しばらくして怒鳴った。

「鷺山隊員！ 緊急事態発生！ 直ちに急行せよ！」

どこの戦隊モノだろうか？

そんなことをやっている間に、黒い霧は俺の視界を浸食し、辛うじて見えていた黒野の後頭部ですらも見えなくなった。さっきまでうるさいほど聞こえていた車の走行音も聞こえず、人の喋り声も聞こえない。

音も光もない世界。

見えない聞こえないということが、こんなに頼りないものだとは思わなかった。

「なあ加納、お前その華に見覚えはないのか？」

前方で黒野の声がした。黒野が伸ばした手が俺の腹に当たった。なんだ、そばにいるんだ。

「そういえば、最近見たような気がする……」

たしかに見たことがある。そして僕は、その名前を知っている。

『思い出して。そうしたら、また会えるから』

彼女はそう言った。

そうだ……思い出した。その華の名は、

「……ブランカ」

俺の口が彼女の名を呟いたその瞬間、いつもの夢が現れた。

闇の中に、白くて巨大な華がほのかに光っている。

そして、その花の中で彼女は眠っていた。

「僕の夢だ」

足が、彼女を求めて歩いて行く。黒野が止めるがかまわない。

やっと思い出せた。会えるんだ。愛しい彼女に。

しっとり濡れた肌に。甘い蜜に。鼻をくすぐる芳香に。

「ブランカ」

声を掛ける。華の真ん中で彼女は眠っていた彼女が身じろぎをすると、その白い手を伸ばし、俺を求めた。

「ああ、晃」

甘く俺を呼びながら俺の首に手を回す。と、そのまま花の中に引きずり込まれた。

「加納！！」

後ろで黒野が何かをわめいているが、もう聞こえない。

ああ……なんていい香りだろう。彼女は俺に口づけ、にこっと笑った。

「ずっと呼びかけているのに……思い出してくれなくて寂しかったわ」

彼女はそう言いながら俺の耳の側でキスをした。囁きが甘く体を突き抜ける。その感動に涙が零れた。

「ごめん」

そう言って彼女の肌をまさぐる。腰に手を回して、そして、キスの嵐を彼女の肌に、唇に、彼女自身に降らせる。彼女は微笑みながら、時に、艶やかな声を上げながら、俺を抱きしめる。

「鷺山まだか！ 加納、いい加減にしろ！ 目を覚ませ！」

黒野の声が遠くで聞こえた。

邪魔しないでくれ。やっと逢えたんだから。

金粉がちりばめられた金色の髪は、ふれるとしっとり濡れていた。

「ねえ、こっちを向いて」

魅惑的な声が耳を掠める。そちらを向くと、唇が俺の唇を奪い、舌が入り込んできた。ねっとりとした甘い舌が、口内をかき回す。頭がクラクラする。

「ね。またこうしましょうよ」

その時、

「鷺山参上！」

ヒーローみたいな声と共に、花びらを掻き分けて現れたのは、大量のマーガレットを背負った鷺山と、やはり頬と頭からマーガレットを生やした黒野だった。ふたりともどうやって僕の夢に入り込んだんだ？

鷺山は不機嫌な顔で言った。

「姉ちゃんその辺でやめておけ。俺は案外嫉妬深いんだ」

そして鞆の中から何かを取り出した。それを見た瞬間、彼女が体を硬くし、僕の背中に隠れた。それは、鋭く輝く剪定バサミだった。

「あのな、お前が嫉妬してどうするんだ」

黒野が顔から出たマーガレットの茎の根本をぼりぼりと掻きながら、ため息をついた。

「だって、綺麗なお姉さんがあんなコトしてくれるんだぞ？ 俺もすっげえやりてえ！」

「相手が華でもか？」

「関係ないね！」

そのやりとりを聞いているうちに、彼女はぶるぶると震えだし、俺の肩越しに二人に懇願した。

「おねがい、それだけはやめて。この人は帰すから」

え？

「……冗談じゃない！ 君が華でもなんでもいい。僕は君が好きだ。ずっと一緒に……」

プロポーズみたいだけど、本当の気持ちだった。でも彼女は小さく笑っただけで、申し訳なさそうに目を伏せた。

「ごめんね、晃。ずっと一緒にいたいけど、この人達本気みたいだから」

振り向いて二人を見ると鷺山ははさみをちょきちょきしているし、黒野は黒い笑顔でこちらを見ていた。本気で彼女を切るつもりか？ 僕が二人を殴ろうと思った矢先、彼女は僕にキスをしながら微笑んだ。

「ありがとう……。私はいつでもあなたの側にいるわ。だから、今はお別れしましょう」

「あのさあ！」

鷺山がこっちに怒鳴った。

「俺も相手してやっていいぞ？」

「まさか。マーガレットごときに」

彼女は嘲笑いながら金粉をまき散らし、白い華とともに跡形もなく消えた。

気が付くと俺たち三人は夜の道ばたで立ちつくしていた。寒い風が頬に当たる。

「……あれ？」

さっきまで彼女と一緒にいたのに。月はまだ空のてっぺんから動いていない。時計を見れば、さっきから10分も経っていなかった。

生け垣の向こうに見えるのは見覚えのある小さな芝生の庭。ここ……僕の家庭？

「……こいつだな」

黒野と鷺山が屈んでそれを見つめていた。

月の光を受けて白く輝いている。美しく咲く大輪のカサブランカ。

黒野が僕の方を見て、にんまりと笑った。

「ああ、こいつだ」

季節はずれに咲いた庭のカサブランカ。

母が珍しいこともあるものだと、せっかく綺麗に咲いたのだから近所の人に見て貰おうと玄関先に置いたのだ。蜂も蝶も少なくなったこの時期に咲けば、球根は無理だろうと近所の人が呟いていた……。まさか俺は花粉を運び、雌しべに付ける役をやっていたということか。

「ま、そういうことだ。色男のハニービー」

鷺山がにやにやしながら俺の肩を叩いた。

「一件落着。万事OK」

「無事帰還おめでとう」

明るく笑う二人にそう言われても、やっぱり納得がいかない。それにどうやって黒野と鷺山は俺の夢に入ってこられたのか、あのマーガレットはなんだったのか。聞いてみたが、

「それは内緒ということで」

二人はそろってにんまり笑うだけだった。

ああでも、これが失恋というものだろうか。胸の奥にぽっかりと空いた穴は、広がることも縮まることもなく、その虚しさと一晩中戦うことになった。

夢を見なくなると、すこぶる健康になった。

黒野と鷺山は喜んでくれたが、俺は釈然としなかった。

しかし、彼女は「また」と言った。

華が咲いたら、また彼女は呼ぶのだろうか。

甘い声で、甘い舌で僕を誘惑するのだろうか。

それでもいい。彼女と一緒にいられるなら。

華と蜜蜂の関係でも。

end

雪降るサザンカ(長良さんの恋未満)

くっきくっき。足の下で雪を踏む音と感触が気持ちいい。

道路はまっ白。一本すうっと伸びた車が通ったがあるだけ。

灰色に潰れたそこを避けて、白いところだけを踏みながら歩く。ふり向けば、あたしの足跡がくっきりと残っているはず。

見上げるとどんより灰色の空。塀から伸びる柿の木にたった一個残った柿が、雪を被って冷たそうな赤い顔をしている。

不思議。降り積もった雪に音が吸収されてしまったよう。

ただあたしの足音だけがイヤマフを通して聞こえてくる。

それにしても、近年まれに見る大雪で、しかも日曜日に、なんであたしは必死に雪の中でかけなくちゃいけないのよ！ 雪は容赦なく傘を重くするし、靴下を三枚履いているにもかかわらず冷たく痛い。

彼女にふられたって泣きべそかくような男のところになんで行かなくちゃならんのか。

でも……

足を止め、生け垣のサザンカにふと目を留める。緑の葉の間から八重でピンク色の花がいっぱい顔を覗かせていた。その花達も雪を体に纏っていた。ああ、なんて綺麗なんだろう。ふわふわの雪。ちょっと触れてみたくて手袋を脱いで指を伸ばせば、その先で儚くとけた。

その時、

「どこ行きゃあす」

おじいちゃんっぽい声がした。まわりを見渡すけど、誰もいない。空耳？ それにしては、はっきりと聞こえた。

「珍しいなあ。ワシらの声が聞こえるんか」

って、また声。

「たしか長良んところの子やな」

「ああ、角の義之んとこの若葉ちゃんや。大きゅうなったなあ」

うわわ、なに？ あたしの頭の中どうかなっちゃったの？ これが電波ってやつ！？

「電波ってなんぞ？」

「さあな。わしにはようわからん。若い子はすぐに言葉を作るでな」

その時、サザンカがわさわさと体を揺らして、雪を落とした。ひょっとして、誰かのいたずら？ でも、間違いなくこのサザンカから声がある。まさか、花がしゃべってるの？！

「ああ、さぶさぶ。こう雪が積もっちゃかなわんで」

「……そんで、あんたこの雪にどこ行きゃあすのや。今日はバスは止まっとるぞよ」

「え？」

「朝から全然通らん。それにこの雪は昼まで止まん。バスは昼からやろうなあ」

「がっかり。お母さんと喧嘩してまで出てきたから今更帰れないし。それにきっとまだあいつのことだから、泣いてそうだし。ああどうしよう。」

「なに、友達のところに行くのか。まあこんな雪の日にや」

「今どき感心な子じゃの」

「ち、ちがいます。そうじゃなくて」

「男じゃて」

その声にサザンカがおかしそうに体を揺する。ああ……もう。

「友達です！」

反論してしまった。花を相手に何をやってるんだろう、あたし。

「ほほう、好いた男のところの雪の中をのう。愁傷なことだの。やめとけやめとけ。風邪引くぞ」

かかかと笑い声がするのと入れ違いに、心配そうな声がした。

「どうしても行きたいのか。しゃあないな。まがれっとに頼むかのう」

「そうじゃそうじゃ。それがええ。っと、あいつなんて名前じゃったかの」

「黒野じゃ」

その名前にあたしはびくっとした。どうしておんなじクラスのヤツの名前が出て来るの！
？ ……って、そうとは限らないか。

私が知ってる黒野君はあいつといつもつるんでいる男子で。そういえば夏頃に大量のマーガレットを持ってきてたけど、黒野君の家ってひょっとしてマーガレット栽培してるのかな？

「あやつのまがれっとがあれば船を呼び寄せれるで待っとれよ」

「船？」

って……なに？ 植木鉢か何か？

「冷暖房完備じゃからさぶいことはないぞ」

なんて言うから“冷暖房完備の植木鉢”を想像してしちゃったじゃない。

「ワシらはもう根が深こうなってもうたから、こっから動けんでな。なあに、ちゃんと中の奴には頼んでやるけえ」

「深っけえ雪ん中、ワシらの声が聞こえる子おが困っとるのは忍びん」

「助けたる」

助けて……て?? な、なにをすつもりなの！

「け、結構ですからあ！」

って、言ったにもかかわらず、花達はゆさゆさと体を揺すると、声を発した。

「くうろおのおお、こおいいい」

浪曲のような声が大音量で空を駆け上がるのが見えた。……って、なに、あたし、ヘンだよ。でも、あの立ち上っていく陽炎が声だって理解してる。

でも、昔同じような光景を見たような気がする。大きな花から声が陽炎になって、夏空に吸い込まれていったのを。そう、あの時はひまわりだった。

あまりにも不思議だったから、お母さんに聞いたのに、取り合ってくれなかったんだわ。

そして、今。

あちこちのサザンカが同じように声の陽炎を空に飛ばしている。それが段々東の方へと移動していく。

「じきに来るやろう。友達が百合に取り込まれたとかでしばらく前に咲かせとったで」

「おかげでうるさてかなわん」

「しゃあないわ。青薔薇のヤツがしくじったんやで」

がさがさと体を揺すって笑い声を立てるサザンカたち。

そして、十分が経った。このまま待ってないとだめかな。もう寒くて仕方がないのに。

「なあに。すぐに来るわ」

等と言ってるそばから、

「呼ぶ時はもっと普通に呼んでほしいんだけど」

という声が後ろからした……。うそ、本当に来た。肩で息をしながら足下なんて凄くぬらして

。

「……って、あれ？ 長良さん」

「うん。おはよ」

黒野君は訝しげにサザンカとあたしを交互に見ると、

「……ひょっとして声、聞こえてる？」

と、聞いた。

「そう、みたい」

あたしだってさっき気が付いた。でも、黒野君はそれ以上何も言わなかった。なんだ素っ気ないの。

「……で？ 呼び出したからには何か用があるんだよね？」

「この子おが困っていたですよ、おまえさん、まがれっと使って船を呼んじょくれ」

「自分で呼べるだろ？ 自分の船なんだから」

「わしらあ、ここからもう動けんでなあ」

「たのむわ、まがれっと」

「マーガレットなんて呼ぶな。それに、船でなんて行ったら相手が驚くだろ？」

「なあに、鷺山んどこじゃて」

「鷺山って、え？」

あたしの方を驚いた様子の黒野に軽く照れ笑い。

「うん、まあ」

「そういえば、あいつ彼女に振られて荒れてたな。へえ。こんな雪の日に行くくらい心配なんだね。長良さん」

見透かしたような顔。ああもう……。

「黒野君って案外意地悪だね」

すると、黒野君は笑いながら、

「わかった。じゃあ、二人で冷やかしに行こう」

黒野君は、すうっと大きく息を吸うと、目を閉じた。

体のあちこちからするすると何か緑色のものが出てきて……って、これ！

「マーガレット！」

ふんわりとつぼみを開く白い花。

「超強力な通信機なんだって。宇宙人達が交信するのに使うんだよ。夏に青薔薇型宇宙人に貰った、……って言ったら、信じる？」

あたしは思いっきり首を横に振った。

「……だろうね」

笑いながら上空を見上げる。すると、そこに仄かな影が差した。

そして、気が付くと、あたしと黒野君は、上空から白くなった町を見下ろしていた。町は、灰色と白だった。畑や田んぼは際立って白く、建物の形も白くて曖昧だ。道路の灰色が一直線に町の方へ向かっていて、それをたどるように移動していく。

周りを見て私は絶句した。

「う、わ」

黒野君とあたしのまわりには、沢山のサザンカたちがわさわさと生えていた。大きなサザンカ、小さなサザンカ、沢山のサザンカたちが、根っこで立ってこちらを伺っている。これって、さっきまで話していたサザンカおじいちゃん達の仲間、なのかな？

すると、黒野君がにっこり笑いながら、

「お邪魔してます。えっと、連絡が来てると思うのですが、友達のところまで乗せてくれますか？」

と、丁寧にサザンカたちに頼んでくれた。

サザンカは、わさわさと体を揺らして、……町が動き出した。白く雪に染まった町が、右から左へと流れていく。ちがう。あたし達が動いているんだ。でも、体には動いているように感じない。まるで立体映像の中にいるみたい。そんなことを考えているうちに、

「到着みたいだ」

見慣れた町の形がぐんぐんと大きくなり、止まった。黒野君はにっこり笑ってサザンカたちに一礼。

「ありがとうございました。おじいちゃん達によろしく」

「……あ、ありがとうございました！」

あたしもお辞儀すると、サザンカたちはゆさゆさと体を揺すって、どういたしまして、と、手を振った、ように見えた。

気が付くと、あたしと黒野君はいつのまにかどこかのベランダにいた。締め切ったカーテンには見覚えがある。ああ、鷺山の家だ。

黒野君は無言でガンガンと勢いよく窓を叩いた。

「いつまで寝てるんだ！！ 鷺山起きろ！」

黒野君の体から生えているマーガレットがゆらゆらと揺れるのがなんだかおかしくなっちゃって、あたしはもう笑うしかなかった。

「あ、あっははははははは！」

大声で笑っているあたしをきょとんと見る黒野君。

「……大丈夫？ 長良さん」

「う、うん！ ……ひ、ひいひひひ」

なんでこんなにおかしいんだろう。……って今日はよく考えたらおかしな事ばかりじゃない。夢だよ、これはきっと！

「鷺山！ お前のせいで長良さん壊れちゃったじゃないかあ！」

「こ、こわれてないって。もう、……黒野君ったら、って、あっはっはっは」

すると、からからと大きな窓が開いて、泣き腫らした目をした鷺山がきょとんとした顔でこちらを見ていた。

「……なにしてるの、お前ら」

その背中からも、ひょろんとマーガレットが生えていた。

もう、たまらないよ。こんなのおかしいよ。

二人してマーガレットを体から生やしていて、それでぼかんとこっちを見てるの。

サザンカのおじいちゃん達のおかげで、空も飛んだんだよ？

これが夢じゃなきゃ、なんなのよ！

止まらない笑いのせいで、あたしは盛大に咳き込み、それでも止まらなくてしばらく笑い続けた。そんなあたしを見ていた黒野君と鷺山は、お互いの顔を見合わせて、やっぱり笑った。

ひとしきり笑った後、鷺山はあたしたちを家の中に入れてくれた。最初に入ったリビングは暖房がががががかっていてとても暖かかった。指先や足先がその暖かみでじんじんと痺れて、それも笑えた。「家の人？」と、聞くと、もう仕事に出かけたそうだ。

「じゃあサザンカのおじいさんの船で来たのか！？」

驚く鷺山にのんびりとした黒野君の声が重なった。

「余程あのおじいさん達に気に入られてるんだね。長良さん」

黒野君は自分の家のように煎れてくれたお茶を頂きながら、今までに起こったことを黒野君が説明してくれた。鷺山はさっきまでの情けない顔は何処かにやっちゃって、目をキラキラさせて悔しそうに呟いた。

「なんだよお。俺まだ船に乗ったことないのに」

拗ねている鷺山はなんだか可愛い。だからちょっと折れそうになると手助けをしてしまうのかもしれない。

「で、今回は何で振られたの？」

「……これのせい」

そうやって、鷺山はトレーナーをがばって脱いで見せ……って、見たくないわ！ でも、この

、ところどころから生えているのって、黒野君のものと一緒に、マーガレット？

「見られて変体扱いされた」

「それはお気の毒……ってか、そういう関係だったわけね。長森さんとは」

長森さんっていうのは、鷺山の下級生の彼女の名前。確かに付き合っていることは知ってたけど。

「ほんっと、惜しいことを」

「このケダモノ！ あんな可愛い子にそんなコトするなんて振られて当然！」

憎ったらしい。

「するか！ 若葉のアホ！」

下の名前で罵るところが非常にもう！

「まあまあ。長良さん」

なだめてくれる黒野君には悪いけどさ、一年生を手込めにしようとするこの男が悪いじゃないの！ ……でも何ともなくてよかったよ。そのシャツからひょろんと出てるマーガレットのおかげなんだろうけど、本当にこれで通信してるの？

「ねえ、それって、本当に通信機なの？」

「そう。どこかの宇宙で作られた植物型通信機。でもこれ結構目立つんだよね」

「素朴な疑問なんだけど、宇宙人がいるって本当なの？」

「ん、沢山いるよ。この町内の植物の三分の一は宇宙人か通信機じゃないかな？」

げげげ……めちゃくちゃショック。

「この辺じゃ植物型宇宙人と話せるのは俺たちだけなんだぜ」

偉そうな鷺山を黒野君が笑いながら、否定した。

「そうでもないんだよ。長良さん、マーガレットなしで彼等と話が出来るんだよ」

すると、鷺山は思い切り顔をしかめて、こちらを見た。

「マジ？」

「でも今日初めてだよ。あ、そういえばうるさくてかなわんって言ってたよ。おじいちゃんたち」

それを聞いた黒野君は、神妙な顔をした。

「じゃあ、今までの会話は駄々漏れだったんだ」

それを聞いて、鷺山も慌てて、

「うわあ……やべえこと結構話したよな？ どうしよう」

なんて呻りだした。何を話してたんだろう、この二人。

すると黒野君はおもむろに立ち上がり、

「はさみ、借りる」

って、向こうに行ってしまった。ああ、マーガレットを切り取るつもりなんだ。

それを追いかけて鷺山も行こうとしたから、あたしは思わずトレーナーから出ていたマーガレットを掴んでしまった。

「痛い、放せ……って……？」

そして、鷺山の動きがぴたっと止まった。

な、なによ、その見透かしたような目は！　そんでもって、なによ、その赤面した顔は！

そう思っていると、鷺山の口から信じられない言葉が飛びだし。

「俺のこと好きって……若葉？」

……

「んなわけないだろ、馬鹿あああああ！」

ぎゅ～って思い切り引っ張っても取れないマーガレットから手を離して、「いてえ！」って悲鳴を上げる鷺山を背中にして玄関に向かい、湿ったブーツをもどかしく履いて外に出た。相変わらず雪は降っている。きっとバスは止まったまま。ここから歩いて帰るには遠いけど、仕方ないか。って、歩き始めた。

マーガレットを握ったら、あの時のおじいちゃん達と、同じ状況になった。

ってことは、鷺山、あたしの気持ちを読んだって事？

でも、好きとかじゃない。絶対そんなことない！　のに、どうしてあたしは鷺山の家まで押しかけて来ちゃったんだろう。馬鹿みたい。鷺山に馬鹿って言う資格ないよね。馬鹿言うモンが馬鹿なんだって、小学生の時に言われた文句が頭をよぎった。その時、

「若葉！　勝手に帰るな！」

って、鷺山が追いかけてきた。勝手になって……別にいいじゃない！

「帰るのはあたしの自由でしょ！」

「好きって言ったじゃないか！」

「言ってない！」

「でも、聞こえた」

鷺山が珍しくすごく神妙な顔をした。

もうやだ。なんでこんなことになっちゃったのよ。恥ずかしくて顔から火が出そう。大体「ちがう。ちがうったら！」

大きな声で否定すると、

「ここじゃご近所迷惑だし寒いでしょ？　行ってらっしゃい」

なんて声がして、鷺山の後ろで黒野君が軽く手を振っているのが　　見えた……

と思ったら、いつの間にかあたし達は雪景色を見下ろしていた。

「……うおお！　なにこれ」

「さっきの……」

船の中だ。まわりでサザンカたちがわさわさところらを伺っている。

「そっか。黒野のヤツ」

一人納得した鷺山は、雪景色の床にあぐらをかいて、あたしを見上げた。

「……ちゃんと話、しようぜ？」

もう観念するしかないんだろうか。

こんな、アホで馬鹿で振られただけで泣くようなどうしようもない男を好きかもしれないって。側にいると心臓はばくばくするし、顔は赤くなるし、いろんな鷺山のいいところとか好きなど

ころが浮かんできてすごくすごく……、

「いやだあああ！」

その後、船から下りるまでケンカになったのは、言わなくてもわかるよね？

おしまい。

宇宙船サギソウ（黒野の苦笑）

鷺山が突然、

「花見しよう！ 堤防行こうぜ！」

なんて言い出したのは、春もうらかな日曜の午後だった。ちょうど退屈をしていたからよかったんだけど、いきなり電話口でそれかよ。前置きってものを知らないアホだから仕方がないけど。

近所の堤防には遊歩道があり、その脇に数本の桜が植わっている。ベンチも備わっていてなかなかいいけど、そこはじいちゃんばあちゃんに占拠されているから、裏手にある工場前の桜に陣取るのが俺たちのやり方。

花見といえば酒、と相場は決まっているけど、高校生が屋外で酒かっくらっていたら、おまわりさんに捕まえてくれと言わんばかりなので、お茶会ってことになった。

んだけどさ！ 鷺山のヤツ十分すぎても来ない！

なにかあったのだろうか、いや、きっとあった。あったから遅れてくるに違いない。

とんでもなくどうでもいいことで！

案の定、それから十分後、鷺山はやってきた。

「遅れてごめんな！」

なんて一応謝っているが、へらへら笑って謝ってるって感じはない。そういう奴だ。

「二十分の遅刻」

ちくつと言うと、フェンスの段差に腰を下ろしながら、またも笑った。

「けちけち言うなよ。おごってやるから」

「……」

それならいいんだ。タダよりうまいものはない。

「俺、今日誕生日だったろ？ だから、駅前の献血ルームで勧誘のお姉ちゃんに捕まっちゃってさ。そのお姉ちゃんがまた美人でうちの卒業生だったんだよ！」

等と言いながら、手に提げていたビニールの袋を掲げた。それには老舗和菓子屋さんのロゴ。あそこの菓子は高いんだよな。

「誕生日。そりゃおめでとさん。で、その卒業生のおねえさんにそそのかされて献血をやったあげくに、菓子を買わされたと」

「そそのかされたなんて人間きの悪い。そんなんじゃないって。その姉ちゃんの家が和菓子屋さんで、しかも今期間限定でこんなのやってるんだってさ！」

って、取り出したのは……

「ところてん？」

ひんやりとしている透明なプラスチックの入れ物に入っているのは紛れもなくところてんだ。しかも普通じゃない。

「桜の葉入りのところてんだってよ。いいだろ、桜を見ながらところてん」

「はあ！？」

「さらに、このポイントシールを集めると、500円のお買い物券をGETできるのだ！」

って自慢げに振りかざすカードには、二枚のシールが貼ってあった。

「たまるまで通うつもりか？」

あきれつつ、持ってきたポテチと、コーラも取り出す。

「とりあえず、乾杯かな」

「だねえ」

で、ぷしゅっと乾杯。

桜の花びらが散るところは、なかなか風情があっていいと思う。

青い空と白い花びらのコントラストはきれい……だけど！

横でところてんをすする、ずるるるるという音には、風情も何もあったものではない！

「おお！ けっこううめえ」

無神経にも満足げな鷺山に、意地悪く聞いてやった。

「そういえば、長良さんは誘わなかったの？」

と、言ったとたん、ぶは！！ って、吹いた。きたねえ！

「な、なにをどうしたって？」

聞いてないフリをするあたりがアヤシイ。

「なにもどうしてもない。で、長良さんは」

この女ったらしは、同級生の長良若葉さんに気があるらしい。長良さんも鷺山が気になるらしい。でもふたりともいじっぱりで、どちらも告白しないという微妙な関係が続いている。

「若葉……花粉が怖くて出てこれねえって」

「花粉症なんだ。ってか、やっぱり誘ったんだ！」

いかげんくつついちゃえばいいのに。と、思っていると、どこからか声がした。振り向くと長良さんが堤防をあがってくるところだった。

「お〜い！！ 鷺山あ！ 黒野君！」

花粉症対策の大きな白いマスクが痛々しい。本当に花粉症だったんだ。鷺山の照れ隠しだと思ってた。

「こっち来て！ 変なのみつけたんだよ！！」

怒鳴り声と共に、はくしょいって盛大なくしゃみ。鷺山が、

「変なの？ なんだそりゃあ」

って立ち上がると、長良さんの方に食べかけのところてんをもったまま歩いていった。俺も一瞬の嫌な予感をかき消しつつ、手早く片づける。

「おわ！ なんだこりゃ」

堤防の遊歩道のはずれにある八重桜の前で、長良さんと鷺山が一生懸命見上げていた。まだつぼみの八重桜がそんなに珍しいのか、と、思って近づいてみると、

「……は？」

見たこともない、いや、見たことはある。八重桜の幹から生えている白い鳥の形をした花……。しかも一本じゃない、かなりの数わさわさ生えている！ きっとサギソウの新種だ。売り飛ば

したらどれだけの利益が我が手に！？

「なあこれって、こんな風に咲くんだっけ？」

鷺山が真剣な顔をしてサギソウを見ようと背伸びをする。

「本当のサギソウはちゃんと土から生えるし、咲く季節じゃないと思うんだ。こんなふうに寄生するなんて聞いたことない」

長良さんもそう言いながら首をかしげる。

「そんなのどうでもいいじゃん。持って帰ろうぜ。すげえよこれ」

とにかく木に登って……と思って、はたと思い出した。

去年の夏、植物型宇宙人を間違えて持ち帰ってたいへんなことになったんだ。体からマーガレットが生えてくるし、拾った青薔薇宇宙人はしゃべるし。その青薔薇をUFOに返したら、保護してくれたお礼に、マーガレット型通信機をもらった。それと同時にこの町の植物の三分の一が宇宙人だと知ってかなりショックをうけたっけ……。

まさかと思いながらごくりとつばを飲み込む。

鷺山も同じように神妙な顔をして、

「……宇宙人の可能性大」

なんて言いながら、ごそごそとポケットからアボガドの種大のアレを取り出して太ももに当てた。それはするすると鷺山の中に吸収されていき、やがて緑色の芽が出た。それはするすると茎がのび、ぼぼぽんとマーガレットの花が咲いた。

そう、これが植物型通信機。人の体に埋め込むあたり、なにか間違っていると思うが、宇宙人達はこれが『目立たないもの』と信じているのだ。

「いつ見ても不気味だよな」

見事に体中から生えたマーガレットにため息が出る。同じものを持っているけど、出来る限り使いたくないんだけど……。

「黒野君は？」

当然やるよねって長良さんの目。……ちえっ。

ポケットから種を取り出して腕に埋める。マーガレットが体中から生えてきて、静寂な空間はあっという間にもものすごい声に包まれた。

『急げ、船が出るぞ！』

「まだ、先遣隊が戻っていません。第七部隊と第八部隊です！」

『ぬわにい！』

無線傍受されてるって、気が付いてないみたいだ。しかし、宇宙人達はどこにいるんだろう。きょろきょろとあたりを見渡してみるが、それらしい姿はない。

「なんか……いつもと違うな」

鷺山も顔をしかめる。いつもよりも声が小さくて聞き取りづらいし、姿もない。こういうとき、彼らはうるさいくらい大音響で騒ぎ立てるのに。

「どこにいるんだろう？ お～い！」

呼びかけてみるとざわっと空気が揺れた。

『ニンゲンだ。マーガレットニンゲンだ』

「変な名前を付けるな！……で、何を騒いでるんだよ」

鷲山がけんか腰で言うと、空気は更にざわざわと揺れる。

『地球侵略を夢見てこの地にやってきたが、我々には危険が多すぎた』

おいおい、マジかよ。

「地球侵略とは穏やかじゃないね。でも危険が多すぎたってことは、諦めたってこと？」

すると、鼻を拭こうとマスクをはずした長良さんが、盛大なくしゃみをした。

「は、はあああああつくしょおおおい！！」

すると、彼らの悲鳴が聞こえた。まるで断末魔の叫び。

「大丈夫か？ 何が起こった！？」

鷲山が隊長らしきものに問いかけると、

『かなりの数吹き飛ばされた！！ 畜生、これだからこの星のニンゲンは』

だって?? くしゃみで!? ってことは……。

『第八部隊、帰還致しました！ 第七部隊は未だニンゲンの鼻の中にあります！』

って……って……！！

「まさか、お前ら花粉サイズで、長良さんの体の中に入っていたと？」

それを聞いた長良さんは驚いて目をくるくるさせた。

「入ってって、ま、まだいるの？ あたしの中にいるの！？」

「いるようだねえ、鼻の中に一部隊。災難だな、若葉」

鷲山がよしよしと長良さんの頭を撫でている間に、俺は彼らと連絡を取ろうと試みた。

「あー、あー、いちばん偉い人間こえる？」

『聞こえてるぞ、マーガレットニンゲン2号』

2号って鷲山の下か、俺は。

「とりあえず、その第七部隊だっけ？ 長良さんの鼻から出すから、あんたたちどこかに隠れてよ。また吹き飛ばされたら大変だろ？」

『了解した！ 合図したら頼む』

合図を待ちながら、真っ青になっている長良さんを見る。鷲山もどことなく心配そうにしているのがわかるんだけど……。

「大丈夫だって。な。あ、そうだ、これ終わったら和菓子買いに行かないか？ 団子とか桜餅とかおごってやるから」

……なんて太っ腹な奴。ま、お姉さんとシール目当てなんだろうな。あ、隊長さんの合図だ。

「じゃ、長良さん。くしゃみしてみてよ」

「そんなこと言われても、都合よく出るものじゃないし……」

「マスクはずせば一発だ。がんばれ」

にこにこ顔の鷲山の思惑など何も知らない長良さんは、恥ずかしそうにマスクをはずすと、すっと息を吸って……。

「はくしょん！！」

って、控えめにくしゃみをした。それと同時に、小さく響く悲鳴。

「……これでいいの？」

「たぶん」

しばらくして、

『第七部隊、全員無事生還致しました！』

という報告が隊長のところに入った。鼻の中でよかった。これで胃とかだったら出すの大変だっただろうな。

「全員出たみたいだよ。よかったね。長良さん」

「もう、花粉と同じ大きさの宇宙人なんて信じられない！」

長良さんは半分ベソをかきながら、ティッシュで鼻や口元をぬぐってマスクをすると、大きくため息をついた。

「これで全員揃ったの？」

『ああ。危うく全滅するところだった。全部隊、撤退する！ 世話になったな、マーガレットニンゲン、1号、2号！』

「だから、その名前なんとかしろおお！」

そう叫ぶ鷺山の目の前を、何かが横切った。鳥のような……白い花。

よく見れば、八重桜から生えていたサギソウが、ひとつひとつ飛んでいくじゃないか。

白い小さな鳥どもは、それはそれはきれいな編隊を組み、一瞬こちらを伺ったように見えたが、白いスジのような残層を残し、青い空の向こうに消えた。

それから三人で花見の仕切り直しをした。

食べかけのポテチとところてんでは寂しいところだったけど、長良さんがお菓子やお茶を差し入れしてくれたから、花見らしい花見となった。

「やっぱり女の子がいると花があるよね」

長良さんが持ってきてくれた熱いお茶に舌鼓を打つ。ああ、こういうのいいなあ。

「でも鷺山と黒野君の方が、花があると思うよ？」

そう言って長良さんはくすくす笑った。

「だよな！」

自慢げな鷺山に腹が立つが、長良さんの一言で、俺たちは苦笑した。

「こんなに花いっぱいのお花見ってそうそうないよね！」

空に桜。

地に花びら。

そして、俺たちの体には、満開のマーガレットが咲き誇っていた。

おしまい

マーガレット通信

<http://p.booklog.jp/book/7977>

著者：みずきあかね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akane2003/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/7977>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/7977>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ